

# 下野新聞

life

くらし



健康

health

## 在宅医療全国大会

### 都内でシンポ

# その人らしく最期まで

全国在宅療養支援診療所連絡会初の全国大会が22、23両日、都内で開かれ、在宅医ら約500人が「今、なぜ在宅医療なのか」などのテーマで議論を交わした。連絡会発足から5年の節目。超高齢社会を迎える中、在宅医療を専門の医師に任せるばかりでなく、患者に長年寄り添う「かかりつけ医」も担い、その人らしく生き抜く患者を支えることも提案された。本県の医師も活発に発言した。(山崎一洋)

# 「いま、なぜ在宅か」



シンポジウムで座長を務める小山市の太田秀樹医師(右端)＝都内

## かかりつけ医も担い手に

大会記念シンポジウム

「今、なぜ在宅医療なのか」は、小山市の医療法人アスム理事長で、連絡会事務局長の太田秀樹医師らが座長となり進められた。

太田医師は先進医療を重視しながらも、「人生90年の時代、長寿化に伴う生活障害は積極的治療の対象ではない。病院と外来診療中

心のシステムでは弱った人を支える機能が見過されてきた」と指摘した。さらに「在宅医療の質は大きく向上している。21世紀は、医療や介護、生活支援などが一体となった地域包括ケアの時代」との考えを示した。

底して話し合う大切さが浮き彫りになっている」とし、関係多職種が連携する重要性を訴えた。

日本医師会の横倉義武会長は、かかりつけ医の定義について「何でも相談でき、最新の医療情報を熟知して必要な時に専門医を紹介でき、地域医療、保健福祉を担う総合的な能力が

「東京は「高齢者が自立して尊厳を持ち住み慣れた環境に最期まで住み続ける」という「エイジング・イン・プレイス」の理念、意義などを提示し、それを在宅医療が後押しすることなどを強調。厚生労働省在宅医療推進室の佐々木昌弘室長は政策などを解説した。

## 本県の前原 鶴岡医師 多職種連携の方策報告

大会では、県医師会副会長で壬生町の前原操医師、在宅医療を専門とする下野市のつるかめ診療所の鶴岡優子医師も登壇、報告した。

「かかりつけ医の在宅医療の演者の一人で、「訪問看護をうまく利用しよう」と題して講演した。8診療所の医師、とちぎ訪問看護ステーションみぶなどが密に連携する活動を紹介した。

「つるかめ」は、鶴岡医師が「店主」となって定期的に催す多職種連携を意識した勉強会。東日本大震災をきっかけに「つながる大切さを痛感し始まった。「スイーツと飲み物は欠かせない」というこだわりがあり、カフェの間は愛称で呼び合うルールで和やかな雰囲気を出すといい。鶴岡医師は「時間と空間を共有することは連携の原点」と指摘した。



前原操医師



鶴岡優子医師